

## 表現愛に向かっていく子どもを育む授業と評価

栗田稔生・島末智成

### はじめに

国語科では、めざす子ども像を表現愛に向かっていく子どもと想定してきた。すなわち、今ある自分そのものを、「話す」「聞く」「書く」「読む」ことで他者とかわり、さらに自分の内にある思いや考えを、豊かに自分らしくしていこうとするとともに人間関係をも豊かにしていこうとする子どもこそ、表現愛に向かっている子どもと言える。

今年度は、表現愛に向かっていく子どもを育てるための授業と評価を中心に研究を進めてきた。

### 1 表現愛に向かっていく子どもを育てるためのカリキュラム

まず、授業を考えていく上でのカリキュラム構築の考え方について国語科では以下のように想定した。

#### (1) 3つの領域(横軸)

国語科では、「話す」「聞く」「書く」「読む」ことを、学習指導要領にも示されているように「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3つの領域の学習活動としてまとめて考えている。しかしこれらは、それぞれが独立して存在するのではなく、お互いが密接に関連しあっている。また、3つの領域を支える子どもたちの「関心・意欲・態度」が存在していると考えた。

#### (2) 子どもの育ち(縦軸)

子どもの育ちの中では、「言葉を意識して使っていこうとする時に他者を思いやる心情」と「よりよい言葉の使い方を意識して使うことのできる技能」の二側面が大切だと考えている。

まず、心情面の育ちの想定として、低学年では、「言葉を使って自分の思いを伝えることに楽しさを感じている」、中学年では、「言葉で分かり合えることに嬉しさを感じている」、高学年では、「言葉でよりよい考えを生み出すことに喜びを感じている」と考えた。

次に、技能面の育ちの想定として、低学年では、2年間で「言葉を並べる」「言葉を時間や空間の順に並べる」と想定した。中学年では、2年間で「自分と友だちの考えを比べる」ということ「複数の考えを比べる」ということ「過去の自分の考えと比べる」と想定した。高学年では、2年間で「多数の考えを組み合わせる」ということ「多数の考えのよいところを組み合わせる」ということ「目的に応じて多数の考えのよいところを組み合わせる」と考えた。

この心情と技能の二側面は、密接に関わっているものであるので、「言葉を意識して使っていく心情と技能の育ち」とも言える。

#### (3) カリキュラムを創り出す

3つの領域を横軸に、「言葉を意識して使っていく心情と技能」の育ちを縦軸に設定し、それらがクロスしたところに、国語科の単元が想定されていくのである。これらの単元は、低・中・高の2学年ごとに、らせん的に繰り返し配列していくことで国語科のカリキュラムが創り出されると考えた。

## 2 表現愛に向かっていく子どもを育てるための評価観

### (1) 3つの領域の中で共通のものを見る

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3つの領域は、それぞれが密接に関連している。そうすると、その中で培いたい「言葉を意識して使っていく心情と技能の育ち」は共通していると考えられる。

そこで、「言葉を意識して使っていく心情と技能の育ち」と、具体的な単元の内容と関連させることで、いつ、どこで、何を評価していくのが明確になると考えている。単元の目標としては、「関心・意欲・態度」「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれの目標が設定されるが、それらは全く別個の評価規準をもつのではなく共通した評価規準をもって授業に臨めることになるのである。

### (2) 全体を支えるための評価

以上のような評価規準は、具体的な単元の内容により、少しずつ変化する。ただし、国語科では、単元の内容によらず、国語科の学習全体を支えるような評価規準も存在すると考えた。子どもたちの国語への「関心・意欲・態度」にも通じる自分への気づきを深めることや、お互いを認め合うことは、国語科の学習全体で常に行われておかななくてはならない。この評価は、どのような単元においても指導者として意識しておく必要があるものとして考えている。

#### 自分への気づきを深める

表現愛のねらいの中に、「自分の内にある思いや考えを、豊かに自分らしくしていこうとする」とともに、人間関係をも豊かにしていこうとする子ども」ということがある。そのためには、自分自身で自らの成長を感じ取ると共に、お互いの学びあいの中で生まれてくる相互の信頼関係も大切にしなければならない。子ども自身が、自分は今何を目標にして、どのような手ごたえを感じ取っているのかを見つめられる場が必要である。子ども

自身が自分の活動を振り返る習慣をつけていく必要がある。

#### お互いに認め合う

また、お互いの成長を認め合う場も必要になってくる。単元の中で、交流活動を取り入れていくことが考えられる。

交流では、まず、お互いを認め合うことが前提となった交流になっているかどうかということや、「だれと、いつ、どのようなことで」が明確な交流になっているかどうか、そして、子どもの育ちに応じて違いがある交流になっているかということなどを指導者が意識しておく必要があると考えている。

また、指導者の言葉がけにも、注目したい。指導者は、ただ単に、子どものよさを取り上げるのではなく、例えば、「今の発表は、友だちの意見をつなげてくれた発表だったよ。意見をつなげることはとてもいいことだよ。」などの言葉がけをして、その学年に応じた子どもの育ちや、単元の目標、授業でのめあてに応じた発言や感想を取り上げていくことを意識しておく必要がある。

子どもたちが、自分の発言の何がよかったのかを意識していくことができるような言葉がけや、発言の中のよさを他の子どもたちに、広げていくようしなくてはならない。

#### おわりに

今年度の研究で、低学年・中学年・高学年の2年間の育ちを想定した言葉を意識して使っていく心情と技能の育ちを明らかにすることができた。

ただし、これらの育ちと単元(教材)を組み合わせたときの妥当性を今後は検証していく必要もあろう。また、自分への気づきをどのように深めているのかを指導者が読み取っていく手立てについても、ワークシートの工夫や、ノートの活用方法以外の手立ても探っていく必要があると考えている。